



△とがった口先と大きな耳、先の白い太くて長い尾をもつ

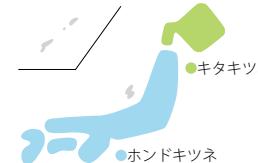
キツネ

食肉目イヌ科 *Vulpes vulpes*

頭胴長38.8~70.5cm 尾長25~44cm 体重1.9~6.7kg

平地から高山まで広く分布する。タヌキ(p.30)ほど姿を見る機会は多くないが、日本を代表する里山動物のひとつだ。主に森林内で暮らすが、林縁付近の草原や農耕地、河川敷などにも姿を現す。動物食で、野ネズミや鳥類、昆虫類などを採食するが、秋季には果実もよく食べる。日本にはキツネが2亜種分布し、本州から九州に分布するホンドキツネ (*V.v. japonica*) は、前足の先全体が黒く、それに対して北海道に分布するキタキツネ (*V.v. schrencki*) は大型で、四肢の先全体が黒い。

※掲載写真はすべてホンドキツネ



足跡

前後足とも4本の指跡と爪の跡が残る。中型犬のものと似るが、キツネは中央の2本指が飛び出し、縦長で肉球の間が空く。ただし、キツネは前足跡の上に後ろ足を重ねるハンター歩き(p.142)をするので、前



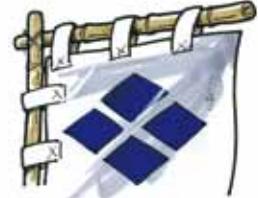
△泥上の前後ろ足のプリント。上が右前足、下が右後ろ足。前足のほうが指が開く



△対岸に渡るために倒木上に残された足跡。積雪のある場合、こういった場所も足跡が見つかるポイント

後足が重ならない足跡を見るのは稀だ。キツネもイヌもプリントは丸みを帯びた菱形だが、第2指と第3指が近くついて、全体として甲斐の武田氏の家紋「四つ割菱」のイメージだ。その紋所をキツネは縦に、イヌは横にしたと考えればよい。

▶武田氏の家紋
「四つ割菱」



◀前足跡の上に後ろ足を重ねるハンター歩き



△雪の上の歩行パターン。ほぼ一直線に残る



▲倒木上に残されたフン（冬季）



▲野ネズミの体毛が混じる毛フン（初夏）

▼カルシウムを含む真っ白い石膏フン（初夏）



フン

キツネのフィールドサインといえばサインポスト（p.142）の意味をもつフンだ。切り株上や草の上など、比較的目立つ場所で見つかる。他の動物食のフンと比べて明らかに太く、ねじれはあるまい。新鮮なフンだと、キツネ特有のニオイが残る。季節により内容物にバリエーションがあり、野ネズミなどの小型哺乳類の体毛、鳥類の羽毛、昆虫類、果実などが含まれる。晩夏から秋季にかけて、甲虫のキチン質を含む「虫フン」が七色に輝く。ときおり真っ白いフンを見ることがあるが、これは「石膏フン」と呼ばれ、採食した小型哺乳類の骨に含まれるカルシウムが固まるからだ。

▼冬のフン。シカの体毛が入っていた



▼冬のフン。新鮮なものは強いキツネ臭がする

▼甲虫やスズメバチを含む虫フン（夏季）



ニオイづけ

キツネ特有のニオイというのは、キツネのオシッコの臭いなのだが、「ツンと鼻をつくニオイ」としか表現できない。シカの死体や、巣穴周辺で臭うことがある。慣れると、このニオイだけでキツネの存在に気づくようになる。

◀雪上に残るニオイ塚。オシッコをする場所は、周辺よりもやや小高くなつたところを選ぶことが多い



食痕

鳥類が襲われた、その現場に落ちている羽根の軸が齧られていたら、間違いないキツネやテン（p.58）などの仕業と考えてよい。襲つたのがオオタカなどの猛禽類であれば、嘴で羽根をむしるので、羽根の軸に歯形はなく、きれいに抜けるからだ。



▼羽根の軸は齧られてギザギザに欠けている

▲キツネに襲われ散乱したカラスの羽根

鳴き声

鳴き声もキツネのフィールドサインのひとつだ。交尾期は12月下旬～1月にかけて、その頃になるとオスがメスを求める「ギャワワワーン」という声を聞くことがある。雪の上に、2頭が恋狂いで転げ回った跡が見つかるのも、この時期だ。





▲河川敷につくられた巣穴。出入り口前にはテラスになる



巣

巣穴は割合に開けた場所が多く、木立に隠れた林縁、防火林帯の南、樹林内の東南の斜面、河川敷などで見つかる。春先、そうした場所で新しくかき出した盛り土を見つけたらキツネの巣穴だ。穴の数は多くて3～5個、普通は2個。出入り口は体形と同じ縦長。盛り土はやがて踏み固められ、巣穴の前はテラスになる。夏季から秋季に、テラス上にウサギの脚やサンダル、歯形のついた枝などが見つかれば、これは子どものおもちゃだ。親がテラスまでおもちゃを運んできて「チュルルルル～」と、巣穴の中の子どもを呼び、与える。巣穴に続くケモノ道に、サンダルやカップ麺の空き容器などが見つかる場合も子育てをしている証拠だ。放棄した巣穴を小型カメラでのぞいたことがあるが、巣材は使っていなかった。



▲林縁にある巣穴の前に広がる草地。野ネズミなどが多く、キツネにとって格好な狩り場になる



▲アカマツ林につくられた巣穴。巣穴の前が踏み固められている



▲春先の巣穴。イヌと同じで、後方に土をかき出すようにして穴を掘る



►巣穴に続くケモノ道に点々と落ちているサンダル

▼巣穴の前に落ちていた子どものおもちゃ（ウサギの脚・鳥の尾・発泡スチロール・サンダル・空き缶など）。よく見ると歯形がついている





▲愛嬌のある姿から、民話や古典落語の道化として登場する

タヌキ

食肉目イヌ科 *Nyctereutes procyonoides*

頭胴長53~61cm 尾長15.5~19.9cm 体重3.2~5kg

平地から山地まで広く分布し、積極的に人間の生活を取り入れる里山動物。都市の公園や住宅地にもすむ。雑食性で野ネズミや鳥類、果実などを食べるが、主な食べ物はミミズ類や昆虫類の幼虫など土壤動物。お供え物のあがるお稲荷さんや田んぼなど、さまざまな場所でフィールドサインが見つかる。日本には2亜種が分布し、本州から九州に分布するホンドタヌキ (*N.p.viverrinus*) は周年活動するが、北海道に分布するエゾタヌキ (*N.p.albus*) は、冬季に冬ごもり (p.142) する。※掲載写真はすべてホンドタヌキ



足跡

田んぼや河川敷など、水辺でよく目にする足跡だ。4本の指跡と爪の跡が残る。後ろ足は前足より指がすばまっており、爪の跡もほとんど残らない。全体に丸く、ウメの花を連想させるかわいらしい形だ。大きさや形が似るイエネコの足跡は、蹠球が台形で、爪の跡はふつう残らない。

▼イエネコの足跡。
蹠球は台形

►キツネのように前足の跡に後ろ足を重ねて歩行しても、タヌキは何歩目かでずれる

▼雪上で足跡を観察するには、午前中がいい



▼砂地に残された前後足のプリント。4本の指と爪の跡を残す。上が右前足、下が右後ろ足

▼田んぼの泥の上に残された歩行パターン。肩幅が広いためジグザグになる





粪

タヌキのフィールドサインといえば「ため粪場」だ。ため粪場を見つけるコツは、広い視野で林床を眺め、地表の色が他と違う場所を探すこと。ため粪場は主に家族で使うが、テリトリー以外の個体も利用する。縄張り宣言の意味以外に、引っ越しの挨拶など掲示板の役目もあるのだろう。見つかる場所は、やぶの中や林道上、尾根沿いや開けた場所などさまざままで、コレといった共通点は見当たらない。冬季から春季には直径1m、高さが10cmほどの規模になるが、ため粪場は永久に存続するわけではなく、場所が数メートルずれたり、突如なくなったりもする。



粪の内容物は、カキやアケビの種子、小型哺乳類の骨や体毛、昆虫類など、季節によってさまざまなものが見られる。里山の場合、夏季から晩秋にかけて6~7割は自

然界のものを食べているが、食べ物の減る冬季や都会の場合、ビニール、アルミホイル、輪ゴムなどが見つかる。人間の残飯をあさることが多くなるのだろう。





▲春の田んぼで食べ物を探すタヌキ

食痕

晩春の田んぼでは、カエルやサンショウウオを採食した痕跡が見られるが、雑食性の動物の食痕は特定しにくいので、一緒に見つかる足跡などのフィールドサインを複合的に読み取る必要がある。

▶畦に潜むシュレーゲルアオガエルの卵塊を掘り出した跡



▼歯形の残る空きチューブ



▲かみちぎられた気泡緩衝材

ケモノ道で歯形の残るマヨネーズの空きチューブやビールの空き缶、ゴルフボールなどがある。すべてが食痕とは言えないが、イヌのように歯や顎の健康のためにもカミカミする必要があるのだろう。キツネ (p.24) も子育て中に子どものおもちゃにするので、タヌキの仕業と一概には言えないが、可能性は高い。



ねぐら

集落周辺では、民家の床下や物置小屋、積まれた土管やI字溝などを利用する。森林内では木の根元や崖にできた洞を使う。また、タヌキは自分で大きな穴を掘らないので、キツネの古巣やアナグマ (p.66) の巣穴を間借りしたりする。他の動物と比べて何でも食べ、得意ではないが、外敵に狙われときに木をのぼることもできるので、子育ての時期を除けば、ねぐらの条件にこだわりはないのだろう。このフットワークの軽いライフスタイルが、里山や都会といった環境でも生きてゆける所以だ。

▼初夏、アナグマの巣穴から出てきた子ダヌキ。アナグマの空き巣も子育て用に利用する



▲室内に残る足跡(矢印)



▼廃屋下の穴をねぐらに利用するタヌキ



▼ちょっとした岩の隙間(矢印)も利用する

同じ穴の貉

アナグマとタヌキはともに「貉」と呼ばれよく混同されるが、その理由のひとつに「同じ穴で暮らす」ということがある。アナグマのセットには多くの出入口が空いているが、アナグマはそのすべてを利用しているわけではない。そこで、自分で穴を掘らないタヌキがちゃんと間借りをするのだ。昔、猟師が貉狩りをするときに、セットの内、ひとつの穴を残して全部ふさぎ、煙でいぶした。たまらず穴から出てきたアナグマを猟銃で撃ったというが、そのときに間借りしていたタヌキもたまらず出てきたことから、同類者を喰える慣用句「同じ穴の貉」が生まれたという。





イリオモテヤマネコ

食肉目ネコ科 *Prionailurus bengalensis iriomotensis*

頭胴長50.5~60.7cm 尾長22~26.6cm 体重2.8~4.5kg

1965年に発見された、世界で西表島だけにすむ野生ネコ。科学的発見の前から、島民からはヤママヤー（山のネコ）と呼ばれ、その存在が知られていた。主に樹林内に生息し、森林、草原、湿地、沼などで鳥類や両生爬虫類、昆虫類などを食べて暮らす。イエネコに似るが、イエネコの耳先がとがっているのに対し、ヤマネコの耳先は丸いことで区別がつく。ずんぐり体形で、四肢が太く、全体にがつちりした印象だ。また、実際の尾はそれほど太くないが、毛が長い分、尾は太く見える。特別天然記念物。日本には他にも対馬にすむ野生ネコの、ツシマヤマネコ (*P.b.euptailurus*) がいる。

爪痕

ヤマネコのフィールドサインといえば、樹皮に残る爪痕だ。写真家の横塚眞己人氏によると、ヤマネコの存在を知る方法のひとつとして、まず目線の高さに入る樹皮に残された爪痕を意識し、もし爪痕が見つかった場合、その周辺でフン、足跡、ニオイなど確認し、さらに木の下の鳥類のフン、割れた卵や巣の有無などを確認し、なぜ木にのぼったのかを調べ、ヤマネコの行動を読み取ってゆくという。



▲狩り場のマンガローブ林に現れたヤマネコ。水を恐れず、泳ぎが上手いので、実際に川を泳ぎ渡る姿も何度も目撃されている。白いラインで縁取られた眼と、その眼と同等の幅をもつ鼻が特徴。また、耳(4.2~4.8cm)の裏に虎耳状斑と呼ばれる白斑があり、これは多くの野生ネコと共通する。後足長10.9~12.2cm

▼木に残されたヤマネコの爪痕（矢印）。目線の高さを探するのがコツだ

足跡

前足は5本指だが、第1指「オオカミ爪（p.12）」は地面につかないため、前後足とも4本の指跡が残る。西表島には昔から「ヤマネコの爪は半出し」という言葉があるように、爪の跡が残る場合がある。おそらく足が泥に潜り込まないように、また滑らないために、爪を出して歩くこともあると思われる。樹上から、潮の引いたマンガローブ林まで生活圏とするヤマネコにとって爪は、多様な環境を走破するのに役立つスペイクなのだろう。横塚氏の話では、沢の岩に飛び移ったヤマネコが着地に失敗し、滑り落ちたのを目撃している。



▲ツシマヤマネコの足跡。深い泥場の場合、爪を使うようだ



▲砂地についた爪の跡の残る足跡。イエネコよりひと回り大きく、掌球の幅が広い



▲自立つ場所に排泄したフン。採食した鳥類、爬虫類、甲殻類が混じる



▼ツシマヤマネコ（飼育個体）のイネ科植物入りフン。イリオモテヤマネコと同様に体毛が混じっていた



▲砂浜に残された歩行パターン。ほぼ一直線につく

フン

フンにはサインポスト（p.142）の意味があり、イエネコのように砂をかけてフンを隠すことではない。新しいフンは茶色や黒っぽい色をしているが、時間が経ち乾燥したものは白っぽくなる。横塚氏によると、内容物は鳥類の羽根、爬虫類のウロコ、両生類の骨、哺乳類の体毛、甲殻類や昆虫類の残骸などさまざまだ。そして、ヤマネコは頻繁に毛づくろいをするので、先端の白い針のように硬い毛が混じるという。また、イネ科植物を含むこと多く、内容物のほとんどを占めることもあるという。ヤマネコは狩り場や休息場のある行動圏をパトロールして暮らすので、オシッコによるマーキング（p.142）も頻繁にする。

